輪王寺

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　輪王寺は、766年に仏教僧・勝道上人(735-817)によって建立されました。勝道上人は、日光山に寺社を建立するという強い思いを持ち、当時の日本の首都・奈良の仏教を学び、苦難の末に日光山を門創しました。何世紀もの時代を経て、輪王寺は、簡素なわらぶき屋根の小屋から、最も壮大で美しい堂や社からなる巨大な寺院群へと変貌を遂げます。(その間には、)日本を支配した一族「徳川家」の庇護を受けていいます(1603年〜1863年)。今日輪王寺は、日本で最も巨大で最も重要な宗教施建築群の一つとなっており、輪王寺には38の他の重要な文化財とともに、国宝の大猷院霊廟も建立されています。

簡素な小屋から壮大な堂へ

勝道上人と彼の弟子たちが766年に建立した最初の建物は、単なる簡素なわらぶき屋根の小屋でしかありませんでした。しかし勝道上人と彼の弟子は、この寂しげな地域を栄えある宗教建築群にしようと懸命な努力をします。開山からまだ一世紀も経たないううちに、輪王寺は、その頃日本の文化的・政治的首都であった京都の聖人でさえ注目するよう(な寺院)になったのです。彼らは日光を訪れ(日光の発展に)寄与しました。この初期信者の篤い信仰により、輪王寺は瞬く間に、日本で最も偉大な宗教建築群の1つとして発展。その発展は今日まで続いています。

二社一寺

現在、日光には、輪王寺院群と神道の二社、二荒山神社と東照宮があります。しかし近世以前、これらの三寺社は日光山と称され、一つの信仰体系として構成されていた。日光山では、仏教と神道が混淆し、二つの伝統の融和がはかられ、それは日本独自のもので「神仏習合」と呼ばれました。1867年の幕府滅亡後、新政府は、この二つに宗教をはっきりと区別することを決めます。1871年、国の全ての宗教建築が、神道か仏教か1つの宗派だけに帰属することを義務付けた「神仏分離令」が発布されたのです。日光山において、一千年以上に及ぶ神仏習合の習慣の歴史は、どちらかを捨てることは容易なことではなく、その代わりに三つに分かれ、現在の二社一寺の形をとることとなりました。

山こそが仏である

日光における何世紀にもわたる神道と仏教の習合は、独自の信仰を作り出しました。神道は自然(霊)崇拝を基盤とする宗教であり、(周囲の)環境に存在する具体的な自然物を信仰してきました。そのような背景もあり、この地域の偉大な3つの山、すなわち男体山、女峰山、太郎山自体はそれぞれが神であると考えら得ています。千手観音、阿弥陀如来と馬頭観音という輪王寺に安置されている仏教の三仏も、この山々の化身と考えられており、またその逆も言えるのです。

政治的庇護

17世紀に入ってから、日光山は当時の権力者である徳川家の庇護を受け始めます。この時代に、輪王寺の代表的な建物が建てられました。1613年、徳川家の初代将軍・徳川家康は、高僧・天海を自分の宗教上の助言者に登用。天海に対し、日光山貫主として寺院の修復をするよう命じました。もっとも注目すべきなのは、彼が東照宮を創建し、東日本の守護神として家康の霊を祀ったことです。後年、家康の孫・家光(1604–1651)は日光山を支援し続け、日光山を日本で最も壮大な寺院の1つにするよう努めました。日光の中にある大猷院という家光の壮大な霊廟は、遺言により創建されたもの。家康、天海と家光というこれらの人物の努力により、日光山は今日私達が見るような、華麗な寺院群となったのです。

皇室の主導

徳川支配の初期に、家康は国の支配者として自分の正当性をゆるぎないもとのするため、皇室と親密な関係を持つよう努めました。これにより、17世紀の中頃には、仏教への誓いを立てた皇室の皇子が、寺の住職に任命される“門跡寺”として、日光山は指定されるようになりました。日光山の皇子は、「輪王寺宮」と呼ばれ、東京の寛永寺と京都近くの延暦寺の住持も兼任することとなります。(この2寺は)ともに天台宗のとても重要な寺です。徳川家の時代、皇族は政治的・宗教的に大きな裁量を任せられました。その後何世紀にもわたる徳川家と皇室の深い関係はこの頃に築かれたのです。